

6.18 新改訳第三版

- ただ、あなたがたは、聖絶のものに手を出すな。聖絶のものにしないため、聖絶のものを取って、イスラエルの宿営を聖絶のものにし、これにわざわざをもたらさないためである。
- 新改訳2017 あなたがたは聖絶のものには手を出すな。あなたがた自身が聖絶されないようにするため、すなわち、聖絶の物の一部を取ってイスラエルの宿営を聖絶の物とし、これにわざわざをもたらさないようにするためである。
- 口語訳 また、あなたがたは、奉納物に手を触れてはならない。奉納に当り、その奉納物をみずから取って、イスラエルの宿営を、滅ぼさるべきものとし、それを悩ますことのないためである。
- 新共同訳 あなたたちはただ滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。
- 協会共同訳 くれぐれも言うておいて、滅ぼし尽くすべき献げ物に手を出してはならない。あなたがたが滅ぼし尽くしたはずの献げ物に手を出すとき、イスラエルの宿営もまた滅ぼし尽くされるものとなり、災いをもたらされるだろう。
- フラン会訳 奉納物として滅ぼし尽くすべきものに心を奪われるな。奉納物として滅ぼし尽くすべきものに手を出せば、身の破滅、イスラエルの宿営の滅びを招き、災いをもたらすことになる。
- バルバロ訳 おまえたちは自分がヘレムに処されないように気をつけよ。欲にかられて、ヘレムに処されたものの中から盗めば、おまえたちはイスラエルの宿営をヘレムにして不幸に陥れることになる。
- 岩波訳 ただ、あなた方は聖絶すべきものに身を慎め。自分たちで(勝手に)聖絶しないようにせよ。また聖絶すべきものの中からかすめ取り、(逆に)イスラエルの陣営を聖絶されるべきものと同じものにしてしまい、災いをもたらすことがないようにせよ。
- 文語訳 唯汝ら詛はれし物を慎め恐らくは汝ら其を詛はれしものとして献ぐるに方りその詛はれし物を自ら取りてイスラエルの陣営をも詛はるものとならしめ之をして惱ましむるに至らん

	名詞	動詞	名詞	名詞	名詞	動詞	名詞
新改訳	聖絶のものに	聖絶のものにしない	聖絶のものを	聖絶のものにし	聖絶のもの	聖絶のものにする	
口語訳	奉納物	奉納に当たり	奉納物	滅ぼさるべきもの	奉納物	奉納する	滅ぼさるべきもの
新共同訳	滅ぼし尽くすべきもの	奉納に当たり	奉納物を取って	滅ぼされるべきもの	滅ぼし尽くすべきもの	奉納する	滅ぼさるべきもの
フラン会訳	奉納物として	滅ぼし尽くす	奉納物として	滅びを招き	奉納物	滅ぼし尽くす	
文語訳	詛はれし物	詛はれしものとして	詛はれし物	詛はるものとならしめ	詛はれし物	詛はれしものとして	
ヘブル語	קָרָן	קָרָן	קָרָן	קָרָן	קָרָן	קָרָן	
	n.ms.abs+art	hiphil.impf.2mp	n.ms.abs+art	n.ms.abs			
ギリシャ語	ἀναθεματός		ἀναθεματός	ἀναθεμα	ἀναθεμα	ἀναθεματιζω	
	n.gen.ns		n.gen.ns	n.acc.ns			
LXA	accursed thing	accursed	accursed thing				LXXにおいて「he:rem」が「anathema」と訳されない
KJV	accursed thing	accursed	accursed thing	curse	εξολεθρευω	destroy utterly	絶滅する Act3:23
NIV	devoted thing	destruction	destruction		απολλυμι	destroy, ruin, kill	滅ぼす、絶やす、破壊する、殺す
RSV	things devoted	devoted	devoted things	thing for destruction	ἀναθημα	anathe:ma	奉献物、奉納物
(Kohlenburger)							
名詞	קָרָן						29, devoted thing(6), devoted(4), destruction(3), curse(1), destroyed(1), devoted to destrucion(1)――
動詞	קָרָן						51, totally destroyed(13), completely destroyed(6), compleletely destroy(3), annihilimate(1), kill(1)――
(W.L.Holladay)							
名詞	קָרָן						dedication to exclusion from profane use,to destruction,or to solely cultic use,ban,what is banned
動詞	קָרָן						devote to the ban,dedecate to destruction,esp.war booty,men,cattle,dedicate s.thg to Y.by yhe ban

* 現段階において私が適当な日本語訳と考える言葉は「滅霊奉献」。

あなたがたは滅霊奉献物には手を出すな。あなたがた自身が滅霊奉献されないようにするため、すなわち、滅霊奉献物の一部を取ってイスラエルの宿営を滅霊奉献物とし、これにわざわざをもたらさないようにするためである。

b アマレク戦(一五章)

(一) アマレクへの勝利(一五1-9)

2 <アマレク> ↓ 出178-16、民1439-45、申2519、士313、六3。エサウの孫アマレク(創3612)のすえで遊牧民族。既に創147に出るのは、予想的表現(後にアマレク人が住んだ村落)か、それともむしろ「国々の中で首位(初め)のもの」(民2420)として既に活躍していた古い民族が後にエドム人と混じったのである。創3612「そばめ」。聖書以外ほとんど歴史資料の知られない民族である。

3 <聖絶する>(四ハラム)の派生名詞ハラムは、主人だけが独占する妻妾の居室を表すように、この語は神の独占物とする(従って全滅させて人の用には使わせない)ことを表す。レビ272829、申72、一三15-17、二五17-19、ヨシ617、七110-26など。

旧約聖書における聖絶は、現代人の道徳観にはショックを与えるが、戦争における非戦闘員を含む絶滅の惨事そのものは、むしろ第二次大戦やその後の局地戦でも決して解消していない。イスラエルにおいて、戦争は多かれ少なかれ宗教的意味を持つており、戦いは祭司のことで始められ(申202)、陣営には主が歩まれると言われ(申2312-14)、従って開戦は王のいけな奉獻をもってなされ(詩203)、「戦いを聖別する」と表現され(ミカ35)、兵士らは身を聖別した(一サム2-5)。主の契約の箱は、決戦時には戦場に運び出されることもあり(四3、一サム11)。主が戦われると信じられた(民103536、二14、出一七16)。戦いの勝敗はその国の神の優劣を示すからである(一列202328、一列一八33-35)。聖絶は、このような聖戦思想の土壌の中で理解されねばならないが、しかも、聖絶はカナン先住民族だけに命じられた特殊な事柄(申2016-18)という制限の方向が、注目を引く。歴史の事実としても、イスラエルが外国に対して行う聖絶は、これ以後ない。一歴41などの例は、もはや宗教的聖絶の意味を失っており、このような用例は、味方同士の間士討(一歴2023)を描くのに見られる。モアブ王メシヤの碑文やアンシリヤ王セナケリブの手紙(一列一九11)に依然として聖絶が誇らかに語られ続けていることと比較すれば、旧約聖書が聖絶を制限したことの方が意義深い。

旧約聖書は、聖絶を、敵国民族の極悪罪(創1516、申945、一サム一五28)に対する聖なる刑罰という思想に結びつけることによって、古代諸国に普及して、たを行き、道徳的神学的に高めた、と言え。本章が聖絶とからませて、極めて高く、神学的主張を展開している事実を見逃してはならないであろう。

榊原康夫

生誕 1931/9/21 兵庫県芦屋市
死没 2013年1月6日(81歳没)
出身校 神戸改革派神学校
職業 牧師、著作家、神学者、翻訳家

新聖書注解 230~233p

本章はまた、サウル王に批判的である点では、八、二二章などの流れと一脈相通するが、一四章がサウルを、細かい所まで定めに凡帳面で、同時にがんこなまでに意志強固な人物として描くのに対し、本章のサウルは、民の先走りや制止しきれぬほど優柔不断である点で、異質の文書であるとされる。本章は、八、二二章のような真向からの王制批判を見せず(↓28)、かと言って九、一〇章のようなサウル王賛の立場でもないで、両者の中間の立場に立つ資料とされる。このような読み方は、前章のサウルの誓の評価における誤解に基づいていると思われる。そこでのサウルは、凡帳面な律義者や意志強固な人ではなく、暴君なのである。しかも、そのような暴君サウルでさえ民の声に制された事実は(一四45)、むしろ本章でサウルが弁解する民の先走りやそれへの妥協(一五152430)によく調和する。一四32の体験も一五19をよく説明する。本章は前章の順当な発展である。

このように事の順序と論理の展開とを理解するならば、サウル王の決定的遺棄が、「聖絶」という神への全面的奉獻をめぐって起った意義は大きい。サウルは初めから常に宗教的であるので、一三、一四章の罪の実体はともすれば読者から見逃されやすく、彼の挙げる様々な弁解や口実に欺かれやすい(サムエルの遅刻、民の離散と誓約違反)。それだから、一点の妥協もこまかしくあり得ない「聖絶」が、サウルの罪を弁解の余地なく暴露する。

「聖絶」には、「初穂(21) ↓ 22節注釋)も「いけにえ」(22)もあり得ないことを知っている者には、サウルの弁解は全くこっけいである。しかも、サウルが主の命令に忠実に従ったと良心的に確信しているだけに(1320)、そのこっけいさは肌寒いほどの恐ろしさになる。このような矛盾を秘めながら、無言の神におもくじをもつて問うこと(一四4142)は「占の罪」にはかならないし(一五23)、彼がたとい書札や口寄せを排除しても(二八3)、「偶像礼拝の罪」を犯しているのである(一五23)。

カンパーランド長老教会は、信条と教会政治において伝統的な長老教会の特質を継承していますが、中庸の神学を受け入れているという意味において特徴のある教義を持っています。
中庸の神学というのは、人間の救いの教義においてカルヴァン主義でもアルミニウス主義でもなく、中間の立場を取ることです
具体的には、教会設立時に次の四点において、カルヴァン主義の色彩の強いウエストミンスター信仰告白を改訂しました。
①永遠の遺棄はない。
②キリストはある一部の人のためにではなく全人類のために死なれたのである。
③幼くて死んだものは皆、キリストにより、また御霊の聖めによって救われている。
④神の御霊は、キリストの成し遂げた贖罪の及ぶ範囲、すなわち全世界において働いている。それゆえ、あらゆる人に弁解の余地はない。